

百人一首を書きましよう。

高砂の尾の上の桜咲きにけり

外山のかすみ立たずもあらなむ

前権中納言匡房

憂かりける人を初瀬の山おろしよ

激しかれとは祈らぬものを

源俊頼朝臣

契りおきしさせもが露を命にて

あはれ今年の秋もいぬめり

藤原基俊

わたの原漕ぎ出でて見ればひさかたの

雲居にまがふ沖つ白波

法性寺入道前関白太政大臣

【現代語訳】

遙か遠くの高い山の峰の桜が  
咲いたなあ。里に近い山の霞  
はどうか立たないで欲しい。

【現代語訳】

つれなかった人を、私になび  
かせてくださいと初瀬<sup>はつせ</sup>の観音  
に祈ったけれど、初瀬の山お  
ろしよ、あの人のつれなさが  
お前のように激しくなるよう  
にとは祈らなかったのに。

【現代語訳】

お約束してくださいました「ただ  
私を頼みせよ、しめじが原のさせ  
も草」という恵みの露のようなお  
言葉を唯一の頼みとして生きてま  
いりましたが、ああ、今年の秋も  
むなしく過ぎて行くようです。

【現代語訳】

大海原に船を漕ぎ出してみる  
と、雲と見まがうばかりの沖  
の白波である。